

6月23日
～29日は
男女共同参画
週間です

Gender Equality

今とこれからを輝いて生きる

性別にかかわらず誰もが、職場や学校、地域、家庭で、それぞれの個性と能力を発揮できる「男女共同参画社会」を実現するためには 国や地方公共団体だけでなく、市民の皆さん一人ひとりの取組が必要です。私たちの周りのジェンダー平等について、この機会に考えてみませんか？

未来を担う女性たちへ～STEM分野で活躍する女性が伝えたいこと～

STEM(ステム)分野とは、科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Mathematics)の4つの分野を総称した言葉です。

珍しさや揶揄を含んだ「リケジョ(理系女子)」という言葉にも象徴されるように、21世紀になってもなお、STEM分野には、「男性の科目」「女性には向いていない」といった偏見があります。こうした非科学的な偏見は、理系科目から女性を遠ざけ、子どもたちの将来の選択肢に影響を与えかねません。

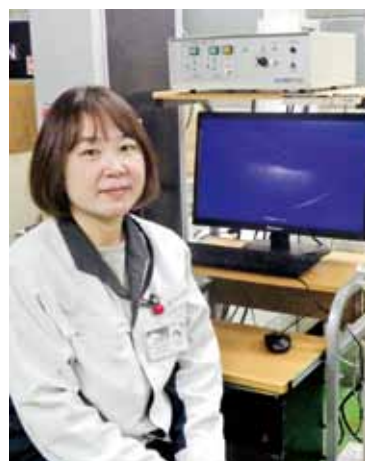
そこで今回は、STEM分野で活躍する小郡市出身の女性にお話を聞きました。

STEM分野に女性が少ないなんて

考えもしなかった高校時代

私がSTEM分野に進むことになったきっかけは、中学時代にテレビを見ていてソーラーパネルの存在を知ったことで、その存在自体に興味を持ちました。太陽光発電は環境問題や貧困問題の解決手段としても有効だということを知り、その開発をしてみたいと思い、父に相談すると、開発なら理系だと言われたため高校1年生の時に理系を選択しました。

でも、実は私の得意科目は国語で、中学の理科や高校の物理は面白いとは思っていませんでしたが苦手科目でした。興味のある科目を勉強することは苦にならなかったのですが、高校時代はよく物理の得意な同級生に教えてもらっていました。



マツダ株式会社 技術研究所

おおろ みわこ
大路 美和子さん

- 小郡市立大原中学校出身
- 広島大学工学部電気電子学科を卒業後、平成14年4月にマツダ株式会社に入社し、技術・研究者として活躍
- 高校生、中学生、小学生の子ども3人を育てる



高校では理系の女子生徒も多く、夢に向かって突き進む同級生から良い影響を受けながら目標に向かって勉強に勤しむことができました。自主性を重んじる高校だったので、自分で最先端の太陽電池の研究を行う大学を調べて、大学は工学部に進もうと決心。幸いにも、私の周りには、女性の工学部進学に対して否定的なことを言う人はいませんでした。

ジェンダーギャップに

初めて気づいた大学時代

広島大学工学部電気電子学科に進学し、女性は学科100人中7人しかいないことに驚きました。これまでの環境とのあまりの違いに、学科生の前で話すときなど心細さを感じることはありませんでしたが、女性だからと特別視されることはなく、男女共に同じ学びを得ることができたと思います。

大学では、システム工学や半導体工学の基礎を学習。例えば、自然界で起きる雷の現象やプログラムを実行するシステムの原理を学び、目に見えない電気電子があらゆる事象に関与していることを知って、日々、面白さを感じていました。

仕事のやりがいや研究することの

面白さを求めて「マツダ」へ

就職先は、太陽電池の研究開発を行っている企業や学んだことを生かせる企業を探していたところ、当時、マツダでは理工系の女性採用を進めており、また教授の勧めもあったことから応募しました。

入社後は、大学で学んだ分野とは異なる生産部門で、高機能・高品質をめざした自動車部品の設計に携わり、現在は、技術研究所で最先端の材料技術の研究を行っています。

仕事のやりがいを感じるのは、新しい発見に触れたときや私自身が携わった仕事の商品として実現したときです。難しい課題がクリアになり、商品になってお客様の元に運ばれ、お客様の喜びにつながることに感動を覚えます。

STEM分野にも

もっと幅広い視点や力が必要

自動車は年齢や性別に関わらず使われる商品であり、同乗者は赤ちゃんから高齢者までが対象になります。環境に配慮しながら多様なニーズに対応するためには、女性視点を含め幅広い視点や力が必要です。

マツダ単体での女性社員比率は令和7年3月末時点で10.5%*です。企業努力もあり少しずつ改善しています。

女性社員比率が上がることで、視野が広がるだけでなく、働き手にとっても、女性特有の体調不良や子育ての悩みを相談できる女性社員がいる安心感があり、キャリア面では、頑張っている女性社員が目標となり、いい面が増えていると感じています。

未来を担う女性たちのために

今後もっと大学・業界のSTEM分野に女性が増えるためには、教育課程の中でSTEM・政治・経済などの女性の活躍が少ない分野の仕事内容や面白さを子どもたちに教え、さらに、性別に関係なく選べる職業だということを伝えることが大切だと思います。また、その分野で活躍する人が魅力を感じて発信することも、STEM分野で仕事をしてみたいという子どもたちが育っていく種まきになると思います。

「女性活躍」というとキラキラと輝くイメージを持たれがちですが、そうではなくて一人ひとりの女性が人生の局面において自分で選択でき、尊厳ある形で生きていけるようにすることです。

私たちの中の偏見を解消し、性別にかかわらず、子どもたちの「面白そう」、「やってみたい」と感じる気持ちを大切にし、後押しできる地域社会にしていくために、市は今後も啓発や取組を進めていきます。

ホームページでは、
大路さんのエピソードを
さらに詳しく
紹介しています。



※非正規社員や他社からの受入れを除く

問 総務課ジェンダー平等・多文化共生
推進室 ☎ 73・9107